

# 埼玉育ちのグローバル人

## ドミニカっ子と過ごした2年間

### 第3回

## 「ハポニョール (Japoñol) になった私」

### 青年海外協力隊 2016年度2次隊 長江 茉莉子



埼玉県マスコット「コバトン」



「ハポニョール (Japoñol)」は私の同僚が作った言葉。創造力豊か(?)な私はスペイン語の語尾をよく変えて話していました。私が作った言葉を同僚は「マリ。今ハポニョールで話してるわよ!」とツッコミを入れてスペイン語を教えてくれたものです。最初は日本語とスペイン語が合わさった言葉という意味でしたが、2年後にはドミニカ生活に馴染んだ日本人という意味で呼ばれるようになりました。

日本にいる時の私は完璧主義で、間違えると恥ずかしいと思ってしまい、最初はスペイン語で話す事を恐れていました。でも、同僚が「ハポニョール」と言っていて私が話すスペイン語を「個性」として認めてくれました。

それからは会議や活動中にスペイン語を間違えても、動じずに話し続けられるようになりました。完璧な言葉で話す事も大切だけれど、他者とのコミュニケーションで一番大切なのは「相手に伝える」ことだと思ったのです。活動計画や重要な伝達事項を積極的にスペイン語でメモを書き、分からないときにはイラストや漫画を描くなど「見る・聞く・読む」全ての方法を用いてコミュニケーションを取るようになりました。一番損をする事は失敗を恐れて「チャンスを逃す」事だとドミニカ共和国での生活を通して学んだのです。

そして私の図工教室での活動やコミュニケーションツールとして絵を描いていた事

が、新しい仕事につながりました。

活動2年目の夏に活動先の児童福祉施設で改修工事が始まりました。その際に施設の責任者達から「マリは絵を描くのが上手だから、施設の壁に絵を描いて。」と声が掛かったのです。

子どもの頃から絵を描くのが好きな私。大好きな子ども達が通う施設の壁に絵を描けるというのはとても嬉しかったのです。絵を描くのが好きなドミニカ人の友人を誘い、2人で新しくできた施設の壁に絵を描きました。責任者から大きな木を描いてほしいと言われ、予算がない中寄付されたペンキを使い、大きな木を描きました。



コメドールの子も達と…。初めて描いた木の壁画の前で皆と写真を撮りました。右側の青い壁に子ども達と数字の壁画を描きました。

翌日出来上がった壁画に「ねえ!あなたは誰?」と声を掛ける3歳の女の子。壁画を見

た他の施設の責任者や子ども達からも「私（僕）も絵を描きたい！」と声が掛かりました。

最初は絵の具や筆を触ったことが無かった子ども達。「大丈夫！筆や絵の具の使い方はマリの教室で覚えたよ。」その言葉はとても頼もしく、嬉しいものでした。



**壁面に挑戦！最初にペンキの塗り方を教えてから始めました。**

6歳から11歳の子ども達が一緒に各施設の壁に壁画を描いていきました。真剣な表情で塗っていく子ども達。その様子を見守る年少の子ども達。皆が一丸となって壁画を作りました。

出来上がった壁画は施設だけでなく地元の人々の間でも評判になりました。そして公立小学校の校長先生も気に入ってくださり、小学校でも壁画を描くことになったのです。



**完成した壁画（手前）。年長の子ども達と一緒に描きました。**



**小学校で描いた壁画。校長先生や卒業生の少年と一緒に学校の塀に作りました。**

プロの方々から見たら完璧とは言えない壁画かもしれませんが、皆で協力してできた壁画は、私達にとって特別な存在になりました。

「私（僕）がココを塗ったんだよ。」と指をさして保護者や年少の子に話している時の子ども達は、達成感と自信に満ちていました。

ドミニカ共和国に来た時、ここまで活動が広がるとは想像もしていませんでした。人との出会いは多くの可能性を生み出すことを改めて感じました。

そして、教育とは大人が一方的に子どもを教育するのではなく、お互いに成長していく場であると感じました。この活動は子ども達に図画工作教室を行って、子ども達に自立心や自尊心などを育む情操教育支援をする事が目的でした。でも、私は活動を通して間違いや失敗をしても前向きに考える、失敗を成功に導く機転と発想力を学び身につける事ができました。帰国後に同僚や家族などから「マリコは強くなって（逞しくなって）帰ってきたね。」と言われ、「日本人の私がハポニョールの私になって帰ってきたのかな。」とドミニカの皆の顔が思い浮かびました。

日本から飛行機を乗り継いでたどり着いた、カリブ海に浮かぶ島国ドミニカ共和国。そこには前向きに生きる、逞しくて明るくて、生きる楽しさと成長する楽しさを教えてくれる人達がいました。